
 学 会 記 事

第63回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成7年4月1日(土)

午後2時開会

場 所 新潟東映ホテル

1階 白鳥の間

I. 一般演題

1) 糖質コルチコイド反応性アルドステロン症の1例

高木 正人・鴨井 久司 (長岡赤十字病院)
金子 兼三 (内科)

症例は37歳、女性、主訴はふらつき、30歳頃より高血圧を指摘されていた。入院時、高血圧(160/102)、低K血症(3.3mEq/l)、血漿アルドステロン(PAC)の高値、血漿レニン活性(PRA)は正常下限、腹部CTにて左副腎の腫大を認めた。デキサメサゾン(DEXA)抑制副腎シンチグラムを施行したところ、両側副腎は描出され、血清K、尿中アルドステロンは正常化し、さらに血圧も正常となったので、糖質コルチコイド反応性アルドステロン症(GRA)と診断した。本例におけるフロセミド一立位負荷試験では、PACは著明に反応したが、DEXA投与で抑制された。Rapid ACTH testではPACとコルチゾールは良好に反応した。DEXA投与前のPACとACTHとは、有意な正の相関関係をみとめ、本例のPACはACTHに強く依存していると思われた。

2) 後腹膜腔鏡下副腎摘除術

郷 秀人・武田 正之
小原 健司・渡辺 竜助
米山 健志・高橋 英祐
車田 茂徳・高橋 公太 (新潟大学泌尿器科)

1994年11月から1995年3月にかけて、副腎腫瘍患者10例に対し後腹膜腔鏡下副腎摘除術を施行した。内分泌学的診断は原発性アルドステロン症5例、クッシング症候群5例で、男性3例、女性7例、右側5例、左側5例であった。1例で、腓損傷のため開放性手術に移行したが、他の9例はいずれも内視鏡的に摘出した。平均手術時間は257分、平均出血量162ml、平均摘出重量15g、平

均経口摂取開始日1.6日、平均歩行開始日2.1日であった。合併症は腓損傷1例、皮下気腫6例で、腓損傷は開放性に修復し、皮下気腫は特に治療を必要としなかった。これまで施行してきた腹腔鏡下副腎摘除術と比較して、手術時間、出血量に差はなく、術後の回復も同程度であった。

3) 再燃を繰り返し治療に苦慮したクッシング病の1例

荒川 道・中川 理
片桐 尚・谷 長行
柴田 昭 (新潟大学第一内科)

症例：70才女性。1987年頃 Cushing 病発症。1988年10月 Hardy の手術をしたが無効のため op¹ DDD を開始。1991年2月、寛解と判定され休薬したが10月より再発。以後、op¹ DDD の継続投与にて副腎不全傾向、休薬により再燃を繰り返していた。1994年10月、3回目の再燃で入院。ACTH-Cor 系は著明に上昇し日内変動は消失。op¹ DDD 再開で効果なく、CB154 2.5mg 併用で速やかに低下した。腹部 CT で副腎の縮小を認めたが、rapid ACTH 負荷で cortisol の反応は残存していた。考察：op¹ DDD 長期投与で副腎の縮小を見たが、休薬により再燃を繰り返した。CB154 の併用が有効であった。

4) 原発性甲状腺機能低下症に下垂体機能低下症を合併した1例

荒川 道・山崎 雅俊
片桐 尚・中川 理
谷 長行・柴田 昭 (新潟大学第一内科)

症例：77歳男性。74歳慢性硬膜下血腫。S53年から高血圧、心房細動で外来加療。H5年10月、胸部圧迫感、ST 低下のため冠動脈造影施行するも異常なし。この時、TSH 7.0、T3 1.2、T4 6.4 なるも放置。H6年12月から低血糖、寒がり、食欲不振、倦怠感徐々に増強し、当科入院。入院時 T3 0.3、FT4 感度以下、TSH 26.2。各種自己抗体は陰性。TRH 負荷試験では過大遅延反応。下垂体機能は GH、性腺系、ACTH-Cortisol 系の反応低下あり。頭部 MRI では empty sella を認めた。1-T4 100 μg 補充下での TRH 負荷試験では TSH は下垂体機能低下のパターンを示した。考察：臨床経過や TSH の上昇から原発性甲状腺機能低下症は確実で、TRH